朝夷巡嶋記

第一編

巻二

イ13
939
~~22~~2

13
939
27

朝夷巡嶋記全傳巻之二

東都　曲亭主人編輯

初輯第三

遠山寺乃児桜
山脚村の教草

却説腰越獣六は。黠兵ホとおもふ。鎌倉ホ出り来る。阿三丸の為体をみて。かの條の奇異怪殘首より尾まで。主の義盛ヨ告〜べ。義盛仰て驚嘆〜。とかまろ〜く。鞆繪ガ霊魂稚児ヨ寅縁ク。汝ホを遂ひ〜せ〜ゐ〜ん寔ホ鞆絵ハ。ホまこみ恥をきる勇婦〜とハそりつも。勅ヨその子の家病と云るヨ。塩ぢど母のまろろ。ホ妻くせんとく。渠ヨ憤を起させてろ。ろぶ過失ハ今きろホ。ふ。ぶうもわふぎめ丑どそのホ非ホ悔く。阿三丸を召ひ〜さんとまろきさ〜ホ怪〜う阻ミて。汝ホ追きら世〜ハあもりホきう祢〜。乳母ガ故郷ハ安房とろ仕ゐ。さ丸くゐそでも

あさうるが阿三丸を捉らんと難くもあらねどもいまは叔己なん。
理るく道ふ崇を受く人と成ることあらじ唐山晋の文公ぶ子推をゆへ
なざりしゆる例るたはあらじ馳せる馬ゆい先ぶうとも及ぶうちの死ぶ言の
葉ふ事と潔くもうた魂の衛ると云ふ阿三丸ハ差るく成長せん欲こそ不
慈ふ恥ぶく不慈るふね親のこころハ神ふそ老ふめ且く棄ぶく再会の時を待んと
やくふ忍ひ入ぶく獣ハホといくこハ外ぶ退せぶ出ぶ蓋て人ゆい告ぶ老のび
ものびは僧を招て鞘絲ぶ巻ふ経紙絹せ追福仏業のいとるまのこと他意
なくりけまさ法祖ふ葉ふハ阿三丸ふ倶しく差るく松ハその日の下浦ふ安
房の白子ふ老しふ夜ところく舊里ふ帰る大藩の郷ふ出りんこふ家ちく
ものくえまふ木ふるくふりし門の松蔦ふ絡せし破邑ふ秋風ゆとふ虫の声ふ外ふ
妻ハるた宿ふ促織ハ妬し蟋蟀誰ふつぐまを刺せと鳴く良人ハけふも馬追欲

ゆくりつくまくゆ柴ふ残ふ蚊遣の火けり紙窓ふり漏し燈火ハ螢だりふ
ふ西ゆれどふ駒し侯の尼折戸推開く進ハ入ぶまゆ嘯とゆあいぶ門ゆとく
さち敲ハどひぶけるたのるぶふ音声ハ方ふ女房ふ葉ふゆハわらぶふと同
つ襲て豊ハハ紙帳の内ふり這出く遠しく指燭しハ戸を引開て迎入ぶ祝ぶ
ふぶう差るた帰郷祝し祝さるく。その楽しさハ融こさり。老ふまとる豊ハハ女
房ぶ恥ぶく素つる稚児のうたふゆまとゆ多飾の著をとふせつ。まぶその故郷尋
るふ。葉ふハ鞘絲ぶ遺言金沢野高の奇異怪珍紙。おちもるく物うこうまく。
辛く追捕を脱ぶまゆつる繹の趣を告しふ。豊ハゆくうち警た。老ふうべこの
ときうたハ。ちん方ぶるふ主君うまとゆ落命ゆして天離る鄙の田舎ふ住き
長則毋御前の遺命とゆうのうふ。ふまとを又その縁ふ連く。過世の応報ふよる
ゆの狡獰脱れぶハ術うくまとゆ且吉凶を按とるふ毋公の仰ふ悖るとも大刀祢の

おやきるやめく。この子をかへし参らせんとさうらへども、人に艱苦をさせ給ふ。ならば夫婦も
幸に追捕の崇承宣べきとだに一旦諾ひし、是令に叛くべく又彼君の怒りをや受
寅縁て。威徳高き和田殿の崇ゆゑ、狭危ありぬ。貴きも賤も親と
あつく子の立身出世をいのらぬはなけれど、秋金柄とりても水飲みぬ農夫の
子にせよとて。愛子を乳母に預けおき、鎌倉よりかけられし追捕の兵士を轉て
支へしたる母との異なるところなる程。其ねく怨まるよしありて、恩義を乗せて愛を
断ちて、崇りのための慮り測りきとそれはいまぞかくも存じて裏にまま
挙る。女児小蔓は襁褓より、生涯親子の恩義を断ち、上総のくに遣して貧の
病は愈して、飽食はなく、女房さへ鎌倉に奉公させ身もなくなりぬと麻衣のうち
寂しきに堪ふる。口はなかりけり。ことぞむかし二と世ありと三年にならぬ
その月今宵ぞひらけける。夫婦が再會、剰主なる郎君までさらに伴ひまゐらせて。

今よりして子ちかくむすびし天の賜、欲素姓を問へは在鎌倉に二と争ぬ武家の
郎君なれど東西をしらず。しらずして微賎なる子になりぬ。ゆゑは定まれるよしの残命なれ
ども吉凶は糾へる縄の如し。鎌倉へ召されてもまた病にて早世せしのぞかの吉れ
凶なる。又村落に入とありても後覚に发跡あるべきのころしは吉かぞ異なる
富貴を願ふ。又らどこの子ゆゑとてこそ夫婦老楽の終は孰らべ今春三月の
勤労は却て果たらで穿きたへと他なるほくいくへ葬るにやかよなりゐる夫乃
あろ。これよりまなく安堵て。夫婦が間に阿三丸を爲せて添乳の草枕
旅路の疲労も忘れ果てまもず小長き夜ともに遠に蘊る抛うちて目出度かぎ
明くる。その楽は浅きなり。さてもこの豊六ら大猪に世を累さる村長の餘裔へ
祖父の時故ありて職にえるまい田地を喪ひ、と貧くなりにけまじき舊き
家子なればば人侮らず。一村の系會畔の総合ゆゑ必渠が招せてよせて古実

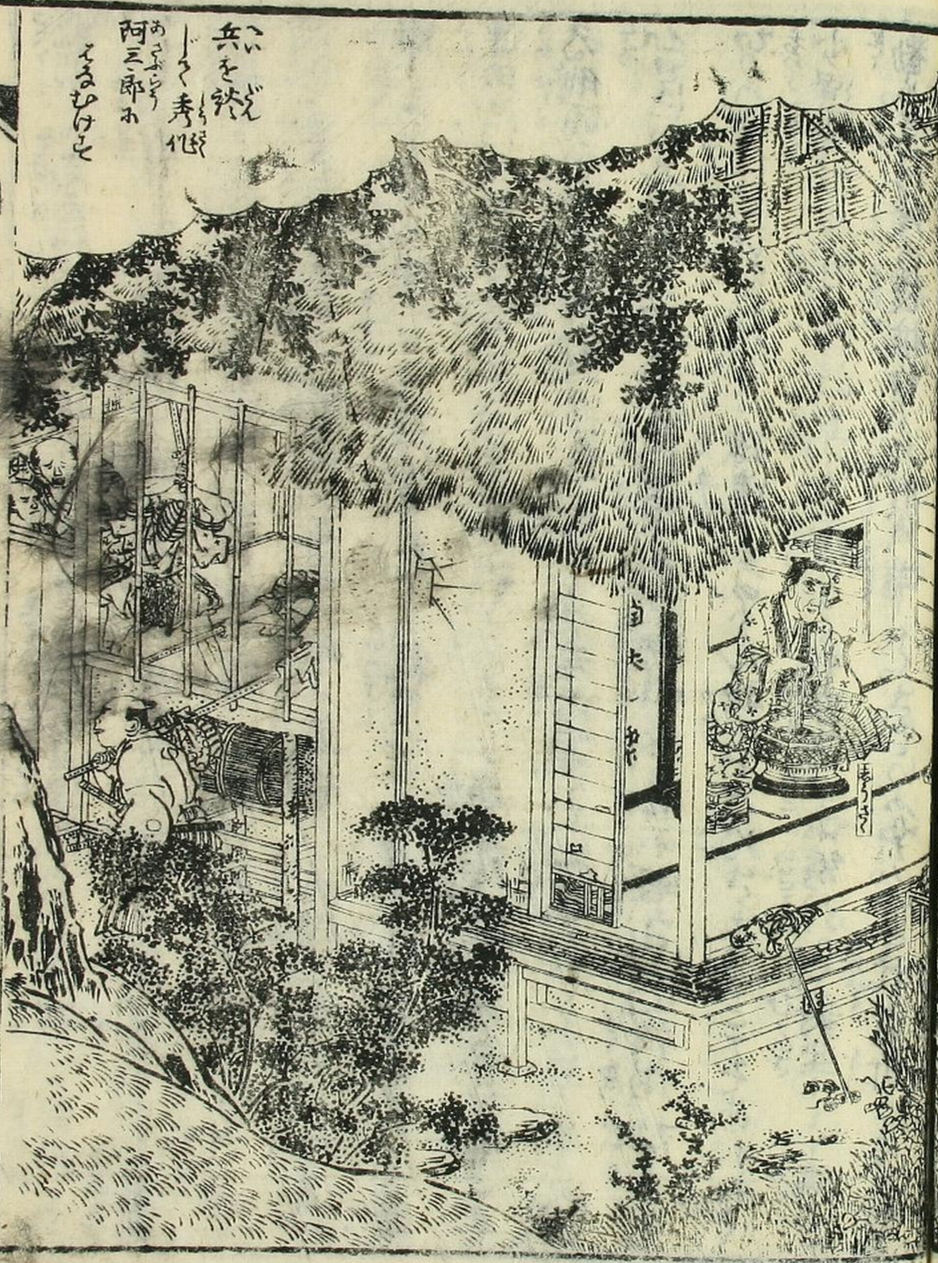
先例式同とあり。素より其の人とやうに貪れども猶ほど。賤きまでも貪るもの。例式引く非法式否。理を推さず不義を強ふ。勢ひ怒も憚らず利に飢くとも後ろ指。もとりぶるふもとるく只一郷のみを表式演べ。その剛直剛腸小藏殷さるものもあり。又その才のきはめて狡媚なく只ちの上のみ怜悧良に拘いなく嗚呼べとて。識るものと亦多くまけり。間語ハさてあれつ次の日ふるひしるべ豊六ハ孫舎ドウ。再び追捕とおけらまく。阿三九と索らくとあるべ。とおふるたんとふくるに報獲て彼稚児と門へも出さぐ。有一日又忍ふ。幼稚とも反逆の餘類をどふ。ものうらべ一日ふりとも舎藏さる。後難脱るべうもあり。私ど渠ハさ法数ものを。恩義ふりて子とひるとも。これいうぞりの咎ハあり追捕の兵士つゆで逼らべ時宜ふよりまく稚児を遁与さとも又遁與さとも只今を決くべ。怒に乗じ紙隠さ却人に疑まん。妻夏ろうとたのみるまぐと忍地ひくせべ。葉

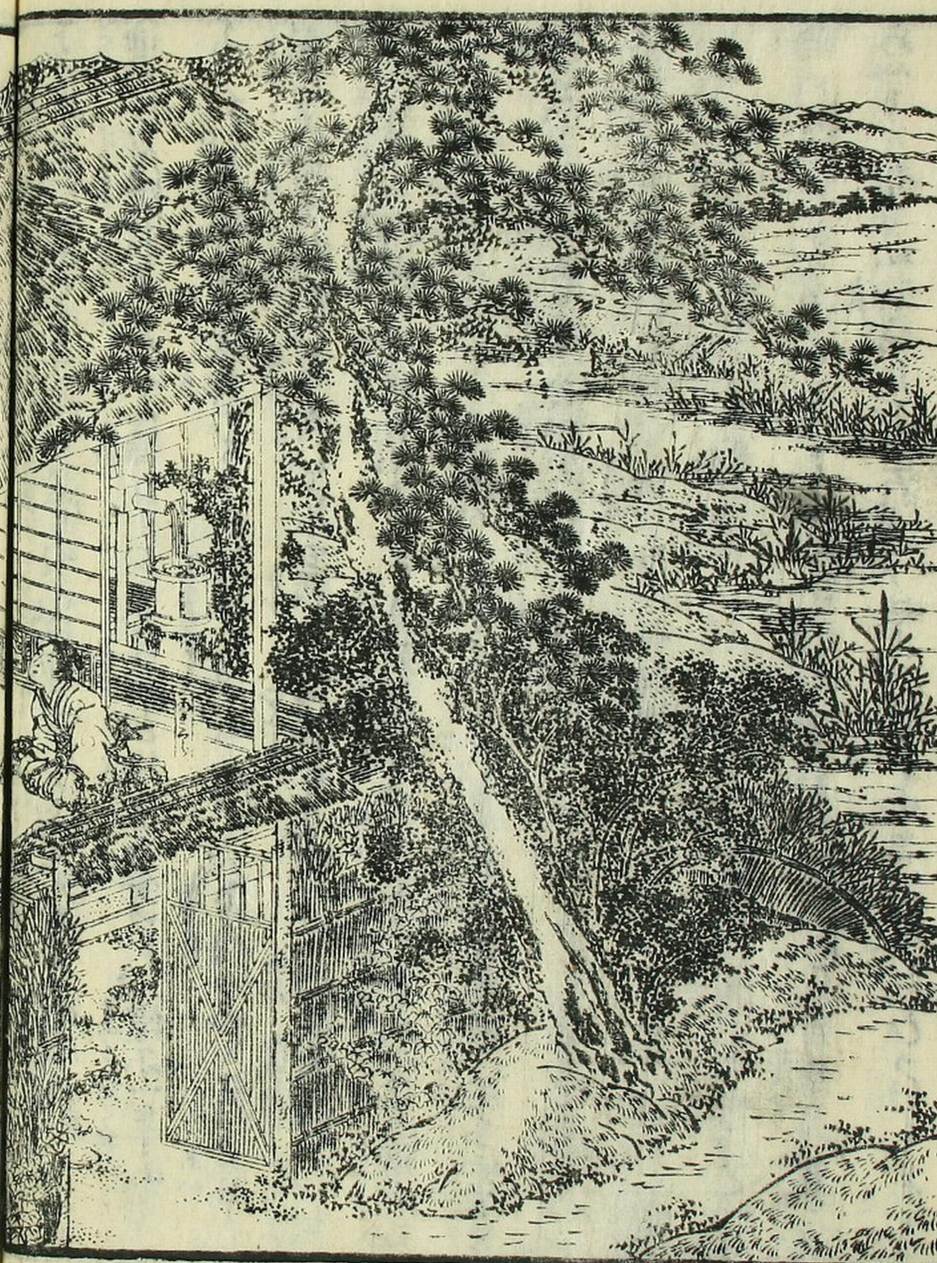
ふもとそのさろ式ぶさせく。それより又人ふ隠さと阿三九のたを強ひく。阿三郎と名けら。常の妹と慈む夫婦ぶ連愛大うこのう孫べ鄰ひ里人ふ捐ぜてつの孤ふ稚児を養ふさふと同ものあまべ見ハ上総へ遣しる女児ハ蔓ぶ兄ろうう。彼と此とハ孫ろりしぶ人に告ふんも面ぶせなまべ鄰ひ人ふも隠しう。さいの比小蔓ひろ共に東金ひろ人遣せ。その養家に故ありく此度猛に叫ぶさまとて真しふ説示せべ。そハ孫さうふめでたるに昼襲ふハ和主ぶ長死病著切羽逼り剣刀身ふも叫ぶとちふ子どもを乗法ぶ如くちふぬ人ふ養せても男児ハ鎌倉ふ給事せ。母にに和主ぶ遣ふ。智恵才学ひく成とうらんや。兄ハ和主ぶ正直のひに宿法神ふちの授けさせゆふ。そぶまべ又今愛も。叫ぶりする日のうぐぐやう老てのハ世間ふ子にまぐ宝ふる形のを。仇ふるぐぐひそとふるに人毎にくたやーく疑ふのふるりけど。ひくてそや

その年も暮て春もうごうかなりかけまど阿三九を入せとて。藤倉う
人もまび白子の濱より彼かれども風の使りを使て孫が豊六葉ゆかさるかち
おて。いよ〳〵子と慈し阿三郎ハ野嶋ゆく。腰越獣六を叱て微ら世ケ谷の
大人猶ようれらハ母の灵馮て。假ゆいらせーめるまび再てハさる挙動てこ
せ孫。その健るるこハ孫てこ。老の身病ゆ似ぎ四五才より及びてハ筋骨逞く力
づたく。同庚なる倅子ゆハ身長一岌てろかり けりゆくても豊六葉ゆ紙実の親
なりと思ひしば。小鹿の角の束の間ゆ墓びとのこてて。孝心自然ゆあられて
親のとうせぬ物るまび欲とくむつるこ紙せまど。尚且の武士ゆと田植草刈こハ
好きで。竹馬と乗まし崔小弓印地打。綱引るどてく日と暮せば豊六やると
やまと寵愛て。葉ゆゆ私語ゆう。氏より育と俗出いど。実の生枝ハ花より
ろるまびいと惜るべたとるのうびや。うがゆ家究て寒しとのとも。夫婦が三びの
食を減。二重の衣紙単ゆしくも渠ゆ学せんとゆ〳〵しるるるる早り。
今よりこれらの用意よりこれハ嗜る酒紙禁るん。ちん弟も又さるるこの持才と
せびや。と正首ゆ潭ゆてくうち点紙そハ紙しるるゆ孫りよりや夜の目と合びは。
織績ごるりるのび弟より細た旦夕の烟の價の外よ又入るこのるのうびやと。
愉く意つ。昊より夫婦力を戮しく。片晌も由断せば阿三郎が八才の春満禄乃
山まへ遣しくゆおさせ学ん問させ親の安否と問んとて。里へ来るとあれい。
豊六ハ笑顔紙ん せびて。叱て激しく。追くさびとのことるまハ阿三郎ゆ
朝るるるよ又母恋しとゆひつも後竟ゆ見ゆ山をひらぎ学の窓ゆ燈を掲てえぬ
世の人紙友とるのて素よりその才冬しうよ孫が年十四五より及びてハ。儒仏乃
道よりけ登りて。蕙蘭の園よ拓び和漢の書を渉猟しく。古今の治乱ゆ通ど

さり。されどもその性たつく。武藝に嗜む所え文ありとも武の疎くば車の片
輪なるべし。実に遺恨のことなり。この時に清正師も
ひとしく憂れ。この山の麓村に健田秀力佐といふ武士の浪人ありけり。渠いまだ壽永
二年の冬十二月。人の後ろ指ふりて鎌倉の営中めぐり給ひける。上総介平廣
常が家臣なり。主君廣常後死の後二君に仕ること願はず。上総介去て安房に
赴く。麓村に僑居しく。領主の家臣郷の壮佐ホに兵法武術の師範りて。とかくと
ひくめも世俗後ろよそ。その性老実ホしく。鶴り飾らず又利欲先はて門戸を張らず。
妻もなく子もなくまたバ。朝夕の薪水一僕に任せるのみ。固より一年三ヶ月に貯
禄なる所の俗患と世に信とりく。分子とえずくよう欲いふのみあるを門三郎ハこれに
ことをいふ頻に慕ひくて。憂時もいはば潜中ホ秀佐が宿所に赴き給ひ
投対面とこと。志状演しく。秀佐見を奇とく。一張ホ及ぶ領諾せり。こをよ

りてぞ阿三郎ハ手を見ぬと只管ホ。志状運ぶのくらは又たがりの関状
健田が刀法を習ふ日ハいと稀なるまとめ。自然と泛る道なるまとめ。僅ホ一年ありて
ホしく。その師も吾状巻ごとホ忽地上達ちしかば秀佐いよくこれを愛て。
軍学の秘決剣術の奥義。ひとも漏さず伝授せり。ひとり大潴ホ阿三
郎が母菜も持病の疲積日ホしく長く病著ホ外ることなく豊六八寺ホ詣来て。
ひとり子ホ緑田と告さそ。ものがたりもおのがよりもとろ。火とも井水状も汲ま片ホ妻と
看病アそハ二番草も接あへず田ハ痩畑ハ荒るのみいふとも せんまでなれば。
師の坊よりえあげくけハ没ぶ力の眼状賜えて来つるえさうとその菜
ホハ命危きとこ。ひくくう肉ホ信しく。うち生る病るまで速ホハ命ぶと醤
師いいへこまてのよう状よくまこて。けのうちまどハ盃えれこハ自然生れ暑預
めづらるるもなるまどこれ進ら世よられなやるるえ。といひうけく苞を


兵を率
阿三郎
朝夷初編巻二


朝夷初編巻二

遠ふく去ぬ阿三郎は母の命に果び胃淡已そぶまく苞と引提く。
方文へ来りん。又ゞ口状を演べ。住持も又これを禁めび病む母ふとて二嚢
の葛ゆくことのりるどとを乞く。弟の暇と賜べ。阿三郎を遠く。机乃上を
笑ぶ畢。孫夏之の一衣ふ久とも。一袱を脊負つ。住持を手来の教育を
謝べ。師兄道人ホ小辞べ。親里へと行く。選る程を武藝乃師範
健田が門弟外ふ。こんかさとふて立ちのぐ。安不弟同母の病著を看とん
る。俄頃ふ親里大賭へ。ゆるはと告べ。秀俊ゆく出迎。そ入ゑ乞
仏世已ゆくべきと。ト。とび里へ。罷りゆく。畊作孝養ふ暇ろのくて。技術誓古を
切ふ任せび。おのづと。疎遠ろ。ん欲さろるさとそあれ。枉く
少選。潭ひの日ハ。ろ阜。と。ゆくも。窓の下ふ誘引く。對坐。く湯と
勧め。葛の袴の稜推ゆ。形端。く。さていゆ。と忙り折とろ。

ふ。世ふ富さろるものハ只人を贈
る。ふ財を用ひ道あるものハ辞ぬとて。この月ろ日来ろ。その骨相と
観て考ふ。和殿ハ老農微賤のゆく子ふ。と惜き人表。加。裲と手来弟
子。鞍ありとゆ。ども。上達の速ろ。和殿の如ぬハ絶さ。僅一年ふ。て。
兵書武術の奥義を究め。その器その量白地ふ老少とりくいを。ぬ。
及ぬ所ふ。ろれども。見やく。伝授せ。ゆ。只一人ふ敵ろ。所ろ士来の
武藝ふ。く。大将のゆ。ゆ要ひ堅き。ぬ摧き。絶き。折ぬ。く一陣ふ。ろ。む
ゆ。ぬ。ぬ士来の勇とゆ。又謀を帷幕ふ。ぬ。ぬ勝ぬ。ぬ千里ふ決ぬ。ぬ。ぬ大
将の勇とゆ。和殿基勇力ふ。ゆ。ぬ。ぬ用ひ所ふ。ぬ。ぬ。その勇ハ却ろ。ぬ。ぬ
ぬ。ぬ何ぬ。ぬ。ぬろ。ぬ。ぬ。和殿の打刀究く。強。打。ぬ。ぬ骨碎け脳も
破く心地ぞ。ぬ。ぬ比ハ。ふ熟。く。鞭ふ力を用ひねども。打振ぬ。ぬ。ハ。

必鳴るなりと云て、豫てより。その聲力あると云ふ。視力あるなり。

用ひざるに、その身に災ひ。智恵あるなり。奠邪が劒を磨ぎ、

錯て一茎の草を沿切るべし。韓信が智を用ひざるに機を隔て竟に益なし。

智の奴にする故に智あるなり。人を使ひ力あるなり。人を使ふ。和歌みづから

力とこのまず。必人に使はるゝ又只匹夫の勇を誇らず。後竟に狹危を招く。

こゝ贈めは則是なり。大刀を佩ぶは何の為ぞ。人を斬べ死為るなり。原

是その身を衛らんがためなり。故に傳燈録に活人劒あり。殺人劒あり。活人

劒を好むは仁義を以城郭とし孝悌を以甲冑とし。礼智の大刀を腰に

佩忠臣の馬に跨り。不義を討非礼を正し。民の土炭を救ふ。戦へば必

捷攻れば必取り。向ふ所竟に敵なし。殺人劒を好むは。栄利を以城郭

とし。勇悍を以甲冑とし。強忍の大刀を腰に佩貪欲の馬に跨り。人を斬る

草の如く血を流すこと雨の如く。怒ること雷の如く。戦ひ勝て掠奪し。刑せられて

ちまちに休む。夫兵は凶器なり。奇を出し。謀を設ること。城を援き。

人を屠ること。偷しとるなり。孫氏が兵書を学ぶものは。

是ぞ。こゝに不仁と言ふ。亦非ずや。諸葛亮が忠信なる人雖ども

ちまちに亡ぶ。されども。その韓非子が拙を残して後世に残る。

いかんぞや。某秀作が如きの。数が兵書を講じ。こゝに大力を舞し。

子房と張良と口を餬ひ。僅に世を送るのみ。顧みるに治世の軍学を。佛経医

書に相似たり。ここに古人の確論なり。たゞ是に況ぶるに。

こゝに武講じ。いかゞ武学のみにて。こゝに為ることなるものは。

戦場に臨む。みづからされと試ざるに何とかなるべき。その可なるべし。所云地獄

天堂とは。こゝに。いかゞ俗談法門。病者を治せざるべし。

みづから学医と稱するが如しさるまとて武の道をくらふ癡
きん慶鼓の皮も貯ざるに急症を救ふ為なり。泰平久しく武を忘れ
遂に非常公驚き言ふ所二方に偏らず利害得失を辨ずるものこそ武道の
達人とのの前にも既に示したり。人武砂ぶんとするものは。おのを却傷らも
おのを砂ぶんとするものは刀を帯て人武制を万能ありとすれども一心の
平生をまたとなし。聲ばかりなる物に登るものこそ高きにあらずとも
ものやまるとなそを迷ひその足戰へて駐らざる心猿既に騒ぎこちなくふるふ
み足もふるふ隨ひ入るものなり。ことそのの高きに熟ざる故に杣番頭の類は
百丈の梢に登り。凌雲の棟と支へ事武他も。彼が智の勝ぬるあらざるもの
熟ざると又その心の乱るると乱ざるとよりもの武術も又ことに似たり未熟

のものの難に臨敵武ふく苟も脱まんとする故に心丹田の下にあるべき類の
意馬を狂へく。ふるみ足もふるふ隨ひならざるに武ふく脱きがたし。又連入
ことと異に難に臨て難と左ことに敵武ふく苟も脱まんと武ふるに。ふるふ丹田の
下にあるべく。その意馬を騒せば。ふるふ武ふして脱き易し。老荘の寓言禪家の
悟道その言ひ異なるとも武術の奥妙まことにあり。ふるふ齢傾ぬ和歌の外に
偉なるの臣和歌年いと少くとも表武稚さ。しく。也才に至りて安房
西郡にいふものさらに天下に敵なるべくして惜しむる平族西海の水泡と消え泰衡
衣河に汚名を流しくとふ。四の海を異に属しく人武用る時にあらざる千里を
走る駿馬も伯楽に遇ざるに老く畎畝の中に死ことも又天の命なり。
人世の福は泰平の民とすることなれども武ある才器力量ありといふとも
みづから頼く心傲らば力を全まるとふ光を埋み德武蘊み親しつる尚

孝を盡し友と交るに信を以て分を守りて生活を懈らざるこれ是学問なり。和殿壯年に至りて其の勇必才なりきんどの在りし日に武術を勤めとい実情を言ふあらんと言ふる道理を逼られて河三郎を感涙の坐に膝を落し紙おばそぎと且く臭うちかけまりいひぬ月ごろの師恩今日の教誨生涯忘るべからず。

齢も小動のいそぢをすぐしゝ実に賢察せらるる如く貧しう親を代らず生活に暇なるべく。おほ郡よりあるべきこゝをおるるなとふ。あまど家の襲ハかなてりて。おのがまゝなりくまで。弁さセ多くといひあまど頻に嗟嘆をなりしが秀俊ぞく張紙うち掉のみくそまゝ僻る見今もひつぞく孝養と生活に暇なる対とあやまて師の妥否を問へとふ教ハ絶えるなる紙親のなるる紙休んるぶ。うや胡麻のごくなることを。

こゝとも何とも思ぬかし。只よく勤く時運成候名を揚家を起しめ。この外ハ一毫もなるまじきなる。長廊沿の時を経ゝ。人の子を苦めり。家者家母の今ハしを待ちびく去りなるいひ果つ。やうやく。といそぐ。これ河三郎ハ感謝に堪ず。茶しく別紙告桃色を脊員つ。遽く生しく秀俊もその後に跟ぬく。折戸口に立ちつ。眉上に紙さゝ翳し。背紙のこゝなる紙休んるぶ。

こゝ紙目送り。

初輯 第四

濱宿の舘の蒲黄
修善寺乃麦湯

さて稲に鎌倉ハ和田小太郎義盛数度の軍功ありて。左衛門尉に補任せられ。建久元年十二月十日京都ゆて挙侍せられ。兼て侍所別當をうけ。別當職ハ拝任より已前治承四年十月に補られ。固様に やでさたつのこなるべ親族ちとく眠きぐひ他門もまるる苦闘るべ當家の

鱠百旦子孫の栄達ふ憑〻くぞ[illegible]義盛ハ彼ふつけ。此ふつけても阿三九ぶ
るのを出ひ出れさいとるつしといつべえよいこで岩間の苔清水源遠くこうれ
て。濁らぬ[illegible]戎後竟ふ環あ人日のなるこどやとそふだりふ果敢るくも。黠乃
年戎送りけり。時ふ建久四年秋八月十日あまりのゆるべ。鎌倉中騒動して
人みな東西ふ奔走し。ひ今合戦ちどりぬと罵騒ぐと大さなるこど綽の虚実ハ
定らなのら祝ど義盛ハ[illegible]ぐもあるこど。営中戎守護せんとく。大紋の下ふ身甲して。
烏帽子の紐を結びあくど。ちや縁親ふ立出まこば馬僕ふ[illegible]ろるく。横ざゆふ牽
よ[illegible]る馬ふ内りとうち跨つ。めども続けと鞭戎あげく。蓦地ふ馳来りこうれば
佐〻木畠山八田下河辺千葉小山この餘眤近の鎌倉武士みな営門戎守護ちる。
人馬整ことく辺つぐうもあくど。ちれども営中ハ異ぶとゆえしふ義盛ちく
心ちのく。ちとり角門よりまこみへり。遠侍ふ祖候しん。日暮て衆皆退散せり。

斯俄頃ふ恩劇ひ縁故戎尋ぬこの幕府朝頼の舎弟範頼朝臣隠謀の企ありと
とく。伊豆の修禅寺へ推閉られ。その家臣橘太左衛門ホ濱の宿の館ふ擯
討ふの軍兵と血戦しく。討死をちくまでぐさても参州範頼ぬしハ左典厩義朝
朝臣の六男ふ遠江州蒲の郷ふ生まれひしぐ。蒲冠者といひて。源家再興の
ちぐめより。東軍ふ与せ加ま幕府の寵用斜ろくぐさまぐ連枝の義とりて。
平家追討の大将軍とうけあり。家弟九郎判官義経ぬしとも軍功あり。或ハ
湖東ふ義仲を討滅し。更ホ屋嶋ふ平族戎屠ふ[illegible]。五年の苦戦ふ身命を擲
三軍ホ将とく。敢士奉ふ徼らど。進むところ至ところ。必ちぐ使者として幕府の
旨を伺ひ。禅ふ[illegible]ちとく恣ふ[illegible]ぐ士来戎得駒礼儀を正しく。老輩戎敬ひて。
その異見を問ざるとなく。人とちり老実ホく。慎むふ[illegible]ぐ後者ありとく
ども市ふ三虎とまのふ至ぐど。西海の使者幕府ふ[illegible]ちく。範頼の書を呈ま

毎日鎌倉殿うちほゝ笑ゐ。左右を見まわし。義経は動もすれば。おのゞ才学を恃先よ
きく。予が旨を問と稀に頼朝をぞる憚ばゞ眼代に差副さる。老輩恐悔まで。無礼
なるゝと推量せり。又範頼は彼と似ぬ。久しう兵糧恐握りるゆゝ。霜だらり色切よ
ゆらぐ。コレ恐敬ふとめくの如。愚に見るのちゝぶやと只管賞嘆おもひ。のゞ
程小蒲殿頼は三河の國守に任せらる。元暦元年六月五日小弾正任せらる。西國静謐の後文治元年十月鎌倉小
糸向しく。濱の宿に寄をあり。金美玉枝とりてたやさるとく。妻子内室乃
盤に飽き。士卒炎党の熟死恐忘る。範頼素より篤実ふして。些も野心なるよ
あゝ程ど忌憚の中小方を寛く。禍を避るの思慮ほゞくとぞ浅者陸恐ゆく。
傾けまうしゆもヨりけるふ今茲建久四年夏五月。鎌倉の右大将頼朝藍沢富
士野に狩倉せんとく。駿河路へ赴れるの営中の留守とく。範頼ゆと残さる
さう。おのゝ月十八日の夜曽我十郎祐成その弟五郎時致とも。富士乃

神野の御旅館へ推参しく。父の仇さる工藤祐経殺害し。剣所寝所ちゝく乱入
おゝく。勝の人殺害ひさる。狼藉の為体鎌倉へ伝へ。古太日の真夜中なり。紀氏
一番の注進ゆ。緯ゆゞ巨細るゝ程ば宿寝の青侍ホその顛末を聞あへ。只
今敵のよるる如く。劇戦ひく罵り騒けば。範頼ゝ。ゆ恐ひく騒ぎ。
人人劇騒ぐ。幕下ハ失させるとも範頼ゆくるゆ恐るゝ。ゆとやハ
あるべ死と声言ふ。ホ制しゆゝども騒ぎ立てる癖なるゆ耳ゆを塞てゆけざるゆ。
第二番の飛脚到来しく。祐成ハ大刀折て仁田四郎忠常に絡れ時致を搦捕
らるゝく。幕下ハ笑ゆ。ゆゝと分明ゆ。ゆゝ心地とて入食をやく
結りけ。浪に件の義経鎌倉殿聞召く。見より乳色快うぶ原来範頼ハ自立
の志あるゆゝ。ゆゝや宿侍ホを推結んゆ。ゆゝ。ゆゝと近臣ホゆ宜ひ。六月の七ゝのヨゆ鎌倉へ
ゆゝの儀言ゆ努ゝ由断をぞゝ。

かゝるひてもさんしう範頼は對面をもよ尽濱の宿の館へ追退けて出仕を禁めらひ
ぶ範頼いとゝおそれ恐ひく。絶て逆心なきよう式。をびく陳じやうさせらるゝど。
るゝ許容なりけるとの故よ範頼は三代の勲功日も戰く競こゝろく。薄氷を
踏ごく。閑居の庭よ秋式迎ゝく。腸式断ごうなるこゝろいとゞ歎ゝよ堪ずて有一日
一通の誓言文紙書ゝめ。文夫属重能を使者とゝく。営中わゝそやつゝせ因幡前
司廣元とゝもゝぶゝく。進覧ゝとゝ式ゝ鎌倉殿御覧さるゝ。文面是よ
慇懃なるゝとゝ。源範頼と書ゝ式。咎めらるゝ。源の字式載さるゝ二族の後と
存ぞる秋楽よおいて分よ過ぐゝ。はゝ起請の失よあらざるや。この義を使者小正
きべゝと仰せるゝ。廣元仰の趣式重能ゝ傳ゝ則陳じやうさせゝ。主ゝてい
参州ゝ。占左西ゝ廐義朝のゝ子なるゝゝ。幕下の連枝ゝ論ゝさるゝゝ。元暦元年う
秋の比。平家ゝ対のゝ使ゝ。西海ゝ追対

使ゝ遣ゝはゝゝ文笑所ゝ。官府よ載ゝるゝ。参州ゝ。分を
知ゝ。自由の儀ゝと弾ゝ式ゝなくゝ。ふけゝ再て何とも仰ゝなくて重
能を召ゝ。ゝ絆ゝ難義よ及ぶ式ゝ。範頼ゝ。劇忠ひて老骨搦太
左衛門尉高保大夫属重能梓治部丞有友江瀧口義人廣通。その外三
廣光當麻大郎武弘赤式召聚ゝ。縛の利害式問せゝ。搦太左衛門治部丞ゝ
領國参河ゝ支帰ゝ。宝飯の城よ籠竜ゝ。郡の民ゝ。安危を決ゝ。
いゝ又大夫属江瀧口ゝ。只ゝ幾遍ゝ陳謝ゝ。過失ゝ式ゝ式ゝ。
畏怖紛紜ゝ定ゝなゝ。ゝ式ゝ範頼是非の境よ迷ゝ。ゝ式ゝ式ゝ。
思ゝ。ゝ大息ゝ。ゝ高ゝ式ゝ逆心ゝ。今一朝の咎ゝ。ゝ本国ゝ道還て。
謀反の名ゝ顕ゝ。ゝ者の虚言実事ゝ。悪名遂よ雪ゝ。ゝ頼ゝ
此度の禍ゝ例の人の逃ゝ。幕下ゝ向ひ火式ゝ。ゝ居て進ゝ

誓文を被露せばやあらんずらん。されば幕下のおん怒りさまでなる
べしあらざる欺こまらのまろス紙とぞ後の月の光期とまでぞ親しき源氏
なりなどあら祝ど密の[illegible]隈なく仰合さるべ北條父子ゆゆしきのみ。
竊に愁訴の[illegible]紙相州時政に渡せ[illegible]辞の虚実咎の軽重を揚問ハ十つ
ちの助け紙なつべし。誰ぞこの紙よくぞと同つ席紙つんこしめ八當麻太
郎進を北條殿の嫡臣なる。湯嶋木工進基勝八某と竹馬の友なり。御意の
短紙竊に告ぐ。まゝくえひぐや。と真実ぐちくやうせしかば能拝敬と
うら点ぞ。そ幸ひのとき。さくよりと直さる彼処へ赴け。とくくといそぐ八當
麻八席紙去んとさとる紙。能く廣通ぞと禁めく。太夫属重能ゆ目を注。
西人斉上座へ勝紙さらくおろぐ。時政ぬゝ八毒蛇なり彼ぬゝ相彈く。
罪紙脱きんとのぐ賊ゆ糧と齎し。讐ゆ刃と藉ゆ如し。後く孟ぞのぐゆ

あらぐ。捌紙拒ゆ身と危うきる。提經紙開くものえいまぐ曉ぞのぐとも一條拒類。
甲斐源氏なり。上総介廣常八創業の功臣なり。さるる過失なのゆえとぞ。
中ゆく斃れぬ。清水三年六月十六日天野藤内遠景小豫く仰紙兼く。又駿河守廣
綱ぬゝ八源三位頼政卿の孫仲綱朝臣の息男なり。年来幕下ゆ後ひしその
志ぞ二なるゆ御家族の上薊なるとゆ。いねる元暦元年六月五日彼四の守ゆ任
せらる。勧賞あるゆ似くぞとゆ。後者のゆる弾ぞく。駿河の四務と禁やられ。剰
京師ゆく。右大将持賀の時十二月朔供奉の人数ゆ定ぐぞたなり。その別ゆ漏
ちるべ世紙憤り。身と沾ぞ忽地逐電ぞのひらく。今ゆその所在を考ぞ辺くを
御舎弟伊豫の判官義経木曽と対平家と滅。源氏一統の世となせしゆ。彼
君の武器ゆ知ぞり。ぞくぞとのその賞ぞ。鎌倉ゆ入ぐぞ。葉落と追れ
彼此ゆ力と寡ぐひく陸奥なる。秀衡紙還ぐひしとぞ。そぞ初始全ぐぞ。

秀衡没後いく程もなくその子どもらが攻撃さるる。文治五年四月晦高館の城は煙と
とゝもに命墓なく失ぬ。こゝに判官殿の頸取て進らせさぶべく又判官殿の泰衡追
ふ。仰せ下されとて如此せしが却て我と谷ゆく大軍を起さるゝ幕下あんぐ対せ
ぬ。泰衡が劇驚をなく早く防られだおるゝ年の秋九月。今泉の柵を破られ
親属従数を喝て。みな悉捕まゆる。昨今のうかゝ国様が
縛みな及覆くく。他人はさん骨肉なりとも功あるゆゑ咎なく員くく大きなる
捕せぬ時政ぬ〳〵幕下の泰山棟梁の武臣とくくとなる練が為なる謀
よりある欲その奸悪をぶべうまぶ。ぶ幾遍も推えして。宮中へ使者をやわらせうち
歎せるひるば。万が一つ召くきまてく。聴させぬとも有りちん。ある大事を挑をく。
正る死人を任しぬぐ物体るくいらまやと。と捽を喝しく練しぶ範頼文をおひ
ぬ。縛果べうもあらざれば。當麻太郎誘ぶ。君ちのどく廣通が。謀の

練を悉さるべく。今度の孤凝を。時政ぬ〳〵幕下の腹心隨一の執権なれども。
娟むあるく。幾ら人ぶ。これその徳のさぶ所廣通とまを悉ありつゝ。憂ゆるぶ
ぬ。某が大功を立ん。我如むゆ。後ゆ悔しく。當日
とも。その甲冑入ぶと言ふを放さく捉さるべ廣通ぬく。冷笑ひ當麻の男
士の稱を得ん。弓剣武藝のうゝ。廣通言さるゝ。并さるべ。ぬる大事が
隔てゝその器あるゝ。某が謀とゝ和殿の智計覚つゝ。といゝ
せもあぶ眼が瞋ぶ。廣通ぶ。ゝゝ我聴忠頼廣常ゝ功ゝ湾ゝ主後の恥と
ゝ。偽若ゝ人の挙動ゝ。この故ゝ殊せゝ。判官殿ゝ見ゆ。そして
強て幕下を追伐の院宣ぬ。その逆心顕ぬ。幾百の時政ありとも。
練ぬく殺ぶべうもあらざ。奥の盡孔ゆ月を置くく。新ゝ二ゝ宣ぶ
さんが汀渚ゆ漕舟の梶原景時ぬ〳〵。どゝ逆櫓の遺恨ゝ。讒言

濱の宿の
茅葺き
大神楽
廣通
當麻と
鏡破を

せしと人みな時政ぬしに何事かあらん。その證據分明ならずば。みだりに席を立せじ。
と勝突者あしと此も騒ず。景時ごとき八尋常の侫人。雖ここに議するにたらざるべき。
砥破は石なれども。何ぞ玉の如し。大奸の人は毒悪なれども。それは賢者の
如し。利口の國家を覆すは聖人の悪む所。和殿なンど深き智をもて量知る
べしこれをいふとも武弘怒をなす故に過言え。瀧口廣通その唇を動さず。
その頤を砕べきに本事ととりません。と脇挿の刀の靶に手を掛し。嗚呼やよ
まてと廣通は扇を取てうち向ひ。此彼面を朱にそそぎ。辞いそ未だ。充光景に
あし禁よと主命に橘太左衛門治部丞重能。廣光なる共に間に入て
推隔稍に送に引とけて辞ひとしく理を推て双方を和寛しつべ。武弘と廣
通ぬ。彼低くあい。只且しく範頼ハ彼ある人を召よせて。舊の処に出つり
しかば今後連が緩まる所。いづきも理りなるなしにあらねど。徒に我音ゆるべんと

未定の理否を争ふ。甚だ不忠なり。と。穆みある主のみ。しなかば慍悦の□
随ぐ。とよもかくにもありぬべし。かまことありざる時まれ。人の批評も親護を□
の情を忘れて鎌倉の心を悼らず。執権を排るの廣通ハに似げなからずや。且武
弘が議に任しく。相州殿の扶助を求めり。穆成らずんば。御くらび議をまじえしこの
上をとまろうると。正首に仰ば。後堂に入りあへば。當麻ハ面目なみにあまりして。
やうやう君を笑へかし笑ふ。廣通は慚愧と。主の背きし目送きハ橘太左衛門治
部丞はいとわのあけに面をあるしく。いざ退散と目礼も折目高なる長袴
に音さやくと踏鳴し。倶の士共に退出ければ。かかりしかば當麻太郎も窃稿に
ちくり物ぞ齋しく。時政が寵臣なる湯嶋木工進が宿所に赴き件の密語で
主君の愁嘆営中の沙汰となる告彼を問く呂曾救をこに求む。木工進は眉
うち顰蒲殿のおんみあらぬ主人も日来より由なしくやくども幕下の凶

乳色凄ばいまでとりなほとそ。おくいあまど和歌の誠忠黙止がに。
意をん
まく閑暇の折を伺ひおしらくてくれかつ
当麻ハ斜めくびに歌びくる。なほ救ひ紙求ること数回更闌て宿所に帰り来瞞ふ
乗りて参刑に縛の証状告ふ々まで。紀頼只管歎賞して則当座の牽物に。
伽羅九と名けける七首の刀を賜ふ。こまハ是頭の殿様の秘蔵の物幕下もよく
知召ひこゝろあの重宝の品でも汝が才文字を賞するのあまり。さの隨よとてまるし
事成厄を釋に至らば。恩賞いと多ようせん。よくせよと宣へば当麻太郎を
七首を。左右のひに受とりて。三遍拝舞して腰に佩君が為めに家と忘れ豫て
うとまする命と思ひ詰の秋。ぞりのの賞せらるる。御相伝の宝刀を
なる。君恩ハとかうしてよ及ばぎといつで幕下のお旨を窺ふ者ぜもらん。
さらばハ再て元身に入り。とやうし果て。ちんまく紙退出しが僅ふ一日を

隔て又湯殿に宿所に赴き対面とて。しばく木に進まる。同室に招き入れ
ぬ。寒暖式述安否と問ひて。ひそ声と低め潭まる彼一枝きのふよ折戻ると主
人に密語いひたとのふ当麻ハ小勝式進めそのうちまり。此ようと問ひ額と
突合せ蒲敷の悲歎和歌の孤忠時政の感賞。ちまぐ学ひのあとこらぶ連
心やりもあらばうもあらまぎこととく歎せのふのこふく。後者の舌と驚くべ証据
るのまを全なる証拠素より幕下賢慮の底ハ時政ふもあらせのハまごこれも
此度のこのこるぶ判官殿式経のあ時もれ連枝のうへなのまびふや。仰合ること
なりあ者ふ故るのこ向ならば。ふいまるひ時政さへ疑せるハなるべ所治
後者ハ雖こ幕下の賢慮ハ個様こと者らん。別こ御所の御寝所の下
るどふ潜びくぬるが便て式沼るのんとハこらぶのぶ死るのふあらぎ明こ地ふる当
麻こ告そと正首ふのれいり。我々まで。和歌とこれハ原夏竹馬の友なるふ

かくれなきその漏せしとて主の為の為に仇となるべきにあらじ。あの人が手を下されし
やまでらのこの餘のくるしみちらし及ばん。みなならの等閑なきあれといふ當麻太郎へ今
さらに靴と履く癖と擽くまちゐさまでに強く簡僅て侍りと祈らしかば
欽しかたり仕迹空く宿所へ入りて。むなしくやあふや。これを廣通と争ひてうけ
あかりしは密事の果さぞ湯殿のひかる隨白地は君にかかるさなが廣通に内容を
かん加以伽羅丸の宝刀と又が賜りしたが。事成らば。又への見衆ふ入りれ
かど。しようぜしの縁なる便宜の給はるのを辿ひて。その甲斐なかりしを面目なさえ。
とてもかくても難義なり。虎の穴に入らずんば終て虎宝と獲がたしと世の譬を
所以あるるいぞく密謀と立らん此時政ぬしの意のまゝ。営中に紛れ入りて
大床の下など新躲きて潜くふまりをおなじといと残ぞふ思ひ決めて病に
假托出仕せずと夜あく出て営門の背面を徘徊しぞさく隙を窺ふ程に此ぞ

八月十日の夜風雨に紛まぎて鎌倉の営中に潜び入り。寝殿の床の下に躬を屈し
て耳を側て窺規へば夜話ハいまぐしかけざりけり。この夜直寝の近臣ハ北條時
政が子江間小四郎義時結城七郎朝光海野太郎幸氏なり。頼朝卿ハこの
弱冠に雙陸を弄して。酉一夜に入り更闌ともあらど睡ぜる程に
當麻太郎ハこのひとときのかり。此風邪に犯されきこころに甲夜より床
の下に伏て更に濕気と受しかば咳欲しく止まず袖の口を掩へども内
より頻りにせき上て。このふに嗄ざ嗄けが義時これを聞つけて怪しや
下に癖者ありといふに主従ちち駭き頼朝卿ハ潜かに義時が禍て次の
間へ御座を移させ賜ひしかば朝光幸氏ひとしく燭のともしけて席薦を支除
床を放せ果して下に伏ものあり。さしもの燭の光に逃んとする
朝光ハ癖者なりと呼びかけて跳くゞりて透さず組む。さかまし當麻ハ力士へ

実に挑争ふて組伏るとも易かるべけれど顕れてなる事を恐ひて撲から
逃んとて進退ぞ途を失ひて犯の獣と身を両擬ば幸氏亦ぞ身寄りて。
朝光にかを数し。家武被んとまる所に義時ハ遠しく走りめぐりの信と
そっく長刀を取のべて。當麻太郎が左の腕をはらひたまざんと辟易けむ忽地さんさと
濵る鮮血とも小武弘ハ懐刀を抜出して長刀の柄を切おとし。嗚呼時かび思ひ
浅くしも湯島に賣られたりとしふとも果ず朝光ハ刃を取らんとのばし
かへて右の腕を擒揚まいらかどとやらへと躱て左へ合はして咒掻きり
死てけり癖者自殺をさとしか朝光幸氏怒は堪ず正る小四郎とが吾们
既にそり要亭て家武被んとせしめ我懃に痍と貝しか小食犾の蔓を
失ひぬと鼓園ハ冷々笑ひ鳴乎みのこともいふべきものかる和殿ホ力足ずして
大事の癖者とどり逃さんと差さりしかば。これをや浅痍と員ぜしかるぶ揚

獲ざりしとて。義時がそれるをとがめ。よ朝光幸氏ハ憎しと思へど先輩えん。
政子時政ホ憚ありて。再びこれと諍ハず。只に諍と嗟死て躯て死骸を引
出せバ。頼朝卿も間ちかく立よりて。御簾にもて怪むべしこの癖者ハ主従豫く
緑ける範頼の老堂なる當麻太郎武弘なりけり。其の帯たりし匕首へおん
父左曲八厩総乃の像見して範頼手来秘蔵の名刀焼刃の中に銘ひきて
またハ伽羅丸と名けられし。又その當麻ハ力士なり。弓箭器械間諜
の術も未熟のものなれども今との刃を身に帯て。坪房の下に躱ひ
ける袷といひ恰といひこれ必範頼が予を刺せんとて潜しける縛向ぞと
顕然たり。嗚呼危きかな危うしと只管に嗟嘆して疾視るの眼中に堪ね
気色ハ顕かにれども。あながちに騒ぎなるかば義時ホ三人の近臣を労ひ
さべ縛もや遠侍よ退へて内外斉一騒ぎさせ。ならが等数のあらん歟

當麻の太郎
漫ま
時政が
奸計ふ
陷れ
時政
義盛
畠山太郎
時政
義盛

ごとく燭を秉り闇を照らして。書院庭面築垣の蔭隈なくあかされバ。雨雲の霄ゆくまゝに秋の夜の長きもやうやく明しけれども。このたびの沙汰まつらんと仰しかバ直寝せしものゝかくてハ却よし絶てなかりしに義時が告ありけん時政卸より祇候して。變異を祝しまいらせ。頼朝卿聞し。近習のものを遠離て時政を招きよせ密談時移しぬひぬさ於程に範頼朝臣ハ憑きたくる當麻太郎ハ病著のよしをゆうしく。密談のすぐに定るたぐひにつかふと稱えびて一日二日と暮しぬるに忽地営中より。時政廣元が連署到来して火急に召せたまひしかバ範頼ハ忙しく。老黨を召聚て如此との事ゆゑん吉凶定るかなれども武弘既に湯嶋に愁訴の趣を告しかバ相州時政殊に憐て幕下に執なしまいり。勘気恩免あらんとて織頃に召せあふたるべし。此旨欣びよろこび給ふすもなく宜へバ老臣ハ眉を顰め辞ひとあくまでいひけり。君曉りたまへずや。當麻太郎武弘ハ勇あれども智謀なし。大事の密談を奉りながら病と稱して籠居るハ。その事成ざるを見んために。さてこそ今虚實と気をうかがひ甚危し。まづ武弘を召せたまひて。その消息を問たまへ。否とならバいかにも當家の危難ならんにあり。とてもかくても枉屈の神の崇ハ今さらに攘ふべきみちなきものを愁に気を立たまひて。釜中の魚となられんより。只この館に楯籠あまく安危を決めたまへかし。憑しからぬ執權が頼ミたまへる物体なるかと各意を述利害を說。面を犯し諫れバ。範頼怒れる声をふり立て。そハ甚しき僻事ぞ。されバ家たちまた野心ありし讒者の舌に苦しめられ。眷恵の度めて盛なるにも。猛に逆意を企て幕下に對しまつり弓を引ことを要せず。當麻太郎を召せと仰せて。忙しく急がせぬるに。その使走り返りて。武弘ハ宿所にあらず。昨夕竊に出たるが何処へ去りしかさらずバ妻子も共に在ずと。返答をまうせしかバ。範頼ハあきれてちちだ茫然されけるぞ。

予が推量は一点違はず。麻太郎は昨夜より。執権の第にありて。この好意を
もろなるべん君命ゆゑ呂氏と共に賀を候ぎ。ゆくゆくは何人か嗣職とあらん。
らく俱にその准備をせよと只管いそがるるなり。江兆人廣通と大夫厲重能は
言の練めに死を忍びもろ共に嘆息し。梓治部丞と橘太左衛門は主の後方に
追携り。各自練んと掖を弗と揮拂ふ風の柳の画障子を推開て後堂に
入り。又せんもぐるりけり。當下四個の老臣ホは席紙ひえ圏坐して。額を
合し商議し。廣通重能は主君ホ俱にて。営中へ参りたるん。橘太左衛門治部丞は
ぢく御館ホ居籠りて。夫人孺君を守護せんとて内外の用意總て由ありはせざり
けり。かくて程よ廣通いろ〳〵ふりやありけん。さり宿所ホ退出でぬ。その
夜。三三廣光を招き。蒲殿俄頃よ営中へ参りて。緯の執主君の正直臣
なるぶ練言。おちなく告ぐ。さていかがせん。前車の覆る轍見て。後車
いかでか全ぐ。死判官殿の滅亡を俗ホ梶原景時が誣言せしかの事。彼
人のゆゑあるべくは。ちろ憎きホ執権を枝を伐翼と。野外戚の威勢を擅ホ
せんとてう功臣のいつがきうん御連枝さんかくの如く。発狂と沼させ。
是非もなき世の形勢。幕下ハ天の許せる将。ちれどもこのものふれと後
つゝせるはハ千慮の一失。今さふホ。うち歎くもあまりあり。痛しいる五景貞。
その性直くして。ちゑ人の好智を測ぬ。一下とびち出ぬ。ひくせこ
日ちあしと。今ちや出ひ決めて。君辱れるとき死。ちるハ固より臣たる道
ぞれハ重能ちろ共ホ何ぬ。ちでもあし俱にて。先途をこそ安んと思ふ。しり囚
まとなるべつ必討ると。向られて。夫人孺君と捕まるん。橘太左衛門治部丞
武略勇敢世ホ。ちくまて。亦忠義の老臣なるべ。阿容ことなく遠ざんや。躯
を討ぬ。引受て。憂時ハ防ぐ戦ふとも。寡をりく衆よ敵ーめ。主役育一

命と頂さぶらふ。亦労〻く切腹。ぶらふ夫人幡太の前、第一の切臣さる。安達藤九郎盛長ぬしの息女ゆてかゝ〻せぶ討ゆの軍兵迫入るとも情なくいさべうとも只ぶりとる紀。孺君白旗九のうへし今茲九才ゆなりとせゆひて。ともさう怜悧くとゝ〻ゆ生拘らるゆひるべ。ちん命危うなん。汝達夫婦ハこの黄昏ゆ孺君のちん倶〻く。竊ゆ下野へ走るとし足利なる。学校の学頭筍長老々。外伯父ゆてとゝせぶ。躾せゆるゆ仮宜なゝ。今ゆそあるとのちく〻ゆ吾君逆心ゆ。ゆゆさぶと幕下みづゝ。暗ゆせゆゆ。蒲殿の郎君へと世ゆ。ちゝるとゝ。その度ハさせる外ロハなゝん欲。ちゝぶ。ちぶ〻ぶ招るべ〻よく勉よと説示ちゝく。准后の沙金五百両。ゆ孺君ゆたてゆ。ちゝるとゝいひゝほとりゆ。さゝ〻ちけぶ。廣光さうちゝくとゝ紙とゝぶ言〻けゆゝりゆひぬ。ちゝゝゆあるとゝ家兄ハ才器人とちる。機ゆ臨ゝ変ゆ応ゆ。謀いとゝゝゝる。某いうでゝ及ぶべゝ願ゆハ家兄孺君の後見ゆ

ちゝるひ孫某ハ大殿のちん倶ゆゝそゝゝゝめ。とゝくハ廣通既紙掉り。この朝ゆ及ぶべゝ私の意を迎ゝハ不忠なり。程妄杵旧が故事をちゝぶゆゆ。死ハ易くして生ハ難。寔ゆゆくもとゝるゆ。忠義ゆ焼ゝゝゝゝゝゆ紙何ゝハ推辞とあゝん。苟も老臣さゝ。主君の先途ゆ後ん。汝ハ又家嫡ゆあゝぶ。郎君のちんゆゆ。速麗ゆを脱ゆゆ。官途ハ兄ゆゆ。又ゆゝく職分あり。兄ハゆゆ譲ゆゆゝく。ゆゆハ兄ゆ代りぶ。とゝく〻といそぶせハ廣光道理ゆ逼らゆゝく。ちゝぶ涙さゝ〻ぶゝく。ゝゝゆあハなくて件の金を受収る程ゝそあゆ。守ゆハ能ゆゝゝゝゝゆ。ゆゆゝゝゝゆ。と廣通ハ遠〻く衣裳式整ハ馬ゆ内りとうち跨ゆぶ後ゆゆのども十餘人列式奈〻く支去ゝり。芝今生の別ゆと目送るゆハ外ゝとゝの秋の日なゆぶ短くく。ゝゝ入相の撞の声。諸行無常と告ゆゝる。庭ゆ春ゆけ紀をとゝゝ。虫ゆゝゝゝゝく哀なり。さても義人廣通ハ去ゝ年の夏の比最愛の妻ゆゆゝりて。

その後今に後妻を娶らねバ兄弟の莫逆なりしかバ廣光を同居させ亡母の姪なりける浅良井といふ女の子をめとらして廣光に妻はし家事をも大かた任せしとぞさる程に廣光ハ兄が忠義を他にせじと思へバ女房浅良井に縁由を諭さらし。夫婦竊に啓行の准備隙なく曛黒なく君所へ参りつゝさあらぬ体に藩邸の出仕を祝しまゐらさせしが此浅良井ハ女の童なりし比より幡太の方に給事しつ。奥ざまのうへ大かたならねバこゝろをえたる女なるに。廣光が妻になりても参ることをりくなきバ今宵も誰か怪むべき浅良井ハとかくして弥母冊の女房等を詭欺らし白鳩丸をそのまゝ竊出し奉りて廣光と後園なる樹下蔭に待つけたり。おん痛しくハ思へども声立させじ人もやきゝつけんとましと念じつゝ後より抱きとり左の手口を推鉗めしく右のてに挟み猿が枝を傳ふごとく築垣を乗踰て肉まちと思ひバ浅良井ハ下括の紐引解て松に

投かけ辛くして外面へ出つゝ。疲る良人の後に跟きつゝ小石に蹉きて宵闇に其処とも知らず喘々十町あまり落ちてけれバやゝしく三ニ廣光ハ人家遠離る畷道稲塚の藁うち敷て白鳩丸を居まゐらせ。夫婦遂に額を著て何ともやゝよそ〳〵しく竊出しなりしかバうち驚せ奉りけん。憎しと思し召さん。かくまで異なるおん倶せし。その故ハ箇様々々とおん父君の大臣難当家の艱辛逼迫十に九ッ脱きずる顛末を告まゐらせ廣通がいひつるまゝ下毛野へとて倶しまゐる縁由をやゝ示すに白鳩つくとうち聞て父うへもいと母うへもいと危く異なる事の由しかさるものを生まても何かせん。とくいなくいへれ廣光といひはやめぐく立つ。三ニ浅良井左右よりやゝ推きえ背を拊撫怜悧なし。まさに人ハさらぬ孝心よいとうきめしく。おぼしめしまさりとていかで三口込ハ定りなるぞかしへバ大刀称も又奥方へも恙なくおはさるゝしと慰めまうし夫婦が

貞さきをかうさるうち瞻りまろ沼をいふあるえうも母うへも恙
るくまーまさぶ丸も又何処へ出くべ死。そ紙るるくふわく走らば。廣光ぶ
僻るみなるん。ゆくても汝達咎なーや。と年才ゆふませそ賢くも。結り多べ
廣光ハ。ゆるまど小膳を丁と鼓御綻寔ふ狂りえ。まるふあれども禍も。
こまと未幾る避ざれば後悔其外よまちぐしを異ゆーく帰館あらば祈る
かひある幸え廣光が無忽の罪何とも仰付られよ。光期のうへふいとり
よりまぶ殘らる井ハ坐る涙さーぐくく。今宵のるり紙幡太の方る告まうえ
とハゆひ侍りしぶさでハ名殘を惜ませまるん。ん敷死の祖痛ーく。いハ
ぬきいるまひあ紙とよるるまる孤紙鬼ゆーく。正な死不ゆも忠
義のるとハ知召れぎふ。そこのひし竊とり。走まるけりと出るるぐ。吾倩
紙憎ても。憎倦ぶぞおぼまるめ。ゆるませ多人と嘗まとるせるく其

方を伏拝ゆハ廣光声を激しくようなる死周淳いふびあらんやさらん君
所へるる迫ゆり。夜ともおいぎまるらんと叱懲ーん白鳩丸をゆくびー
まーらくく。楚と脊負ひく立あぶれハ俄頃る出ゆる関の声矢叫の音
戦馬の蹄るふとる如く。冒塵る。廣光佶と見えりく。地方も正ーく
濱の宿原来たや討るの軍兵推よせ。佶る疑ひるー。ゆまぶ敵も安
穏るのぶ。果敢なく囚まるひーー欲。ゆぶ兄るぶふ義入どの。先見誠ハ一毫
違ぶ形なる死世のまぶまひ。月日ハまる紙賜ぶぶや。と歎けハ共る滅
らぬ良井ゆ。おるーほとりふ伸あぶり。年来御蔭と蒙りし奥えいるふなり
るん。ゆる時ゆハせるく彼溝の梁とも身をなるく。半ゆるまべ死
るの紙外るるゆの悲ーと。哪ゆハ袖の雨るぶぶ。猛火忽地天ハ衝黒
白ゆるるぬ野千玉の烏夜を照らーくいと明く。煙る咽び身を焦ぶ婦

幼の叫ぶ声阿鼻焦熱よ彷彿さう。廣光まぶく嗟嘆しく。さて敵既よ
乱入り。火を放せしと見るに為方もなくなりぬが走るり。そはさる軍まて。
対死せんよ。そまてうろうろ。弓並前の道よ絆さまとく。ぶとところ夜を
あう。捕られるべ悔ともひるー。見まぐなりとぶひ捨て。ゆくまく
さまとぶ白鳩丸ハ廣光ぐ肩うち鼓丸屋形のうち異なる人声猛火

頻アまぶ内丸のぐる式合戦ありと汝達ハえつ知つひうろむやかへせく。焦
燥ぶ自然と伯る智度勇敢現旃檀ハ二葉より。度木ふやうく安ー丸活
丸ぶ強人の物具剥んと野伏三人樹立乃蔭より頭巾出脱ーハせーと
廣光ぐ左右の腋より楚と組むさろ組うりどうり釋丸足我丸ーと
礫と踏る。蹴らまてく斉く輾轉起んとする式。起ーも立ぶ片身なぐりの刀尖

駭く。伴の二人紙砂伏こう。残る一人ちりぢりに刃をうち振走りよるのをし
や。と廣光へ左ゆ水孺君揺揚く。右ゆ血刀内し。西三合丁ことうちあし
こる大刀風ゆ。野伏ゆ頸ゑ桐一巣地上水礙と落ちまく。骸へ後水倒れ
こう。危かりー。と浅良井ハ懐紙をとう出く。鮮血を拭へば。そぶ水ゆ刃を
朝水かさめくも。素ゑ苦ー允世間を。ちのがとまれど月夜より。雲ひく
ゑこなゆ允猫火の光り水柏の鳥立さうゑ允。野寺遥ゆ音ゆなる。蹟もぬ
るうの暇道裾ゑけぬうまと久露の茅の名水ゆぶ下毛野足利投て落く
ゆく時水建久四の年。秋八月下旬なり。傳まゑ阿三郎ゆ十才のとうなよ
ちく。渠へ満福の山寺ゆく。読書ゆ習せー比なるべー。

終

早稲田大学図書館
011888007174